

・・・「ボート」と「わたし」・・・

ボートから得たもの

昭和 44 (1969) 年卒 唐崎 睦範

学生時代を振り返る時、学部 4 年間のボート漕ぎの生活、大学院 2 年間の論文中心の生活に大きく分けることができる。昭和 46 年 (1971) に 6 年間の大学生活を終え、社会人となり、東京へ出た。それ以来、40 年近い歳月が過ぎた。長いようであり、またあつという間でもあつたような気もする。

高校卒業までの 18 年間は生まれ故郷の尾道を離れたことが無かった。広島は 6 年間住んだだけだったが、4 年間ボートを漕いだことで得たものは大きい。

ボート仲間と過ごした時間は青春が凝縮された貴重な経験だった。ボートのトレーニングは筋力と心臓を鍛えることを主眼としている。心肺機能を鍛える代表的陸トレであるサーキットトレーニングでは何分で達成できるかを競った。目標時間内で実行できれば満足し、オーバーすればスタミナへの不安がよぎる。陸トレに限らず、ローイングの苦しさは言葉にできないほどだ。辛くとも苦しくても仲間と同じ目標を持って力を合わせ一心に漕ぐことが日々の生活となった。授業が終われば、合宿所へ急いだ。仲間を待たせることはできない。一人でも欠ければボートは漕げないからだ。

そういう日常を積み重ねて、言葉に出さなくても、ゴールに向かってボートを漕ぎ、スピード感に手ごたえを感じ、気持ち一つにすることができた。まさにボートは本当のチームワークが体现できるスポーツだと言える。クルーの心が一つになるから辛くてもボートを続けることができた。辛い練習では互いに励ましあい、落伍しないよう助け合うこともできた。しっかり水を掴み、ボートをいかに速く進めるかという技術力と共に、スタミナを維持し耐える強い筋力と精神力も不可欠だが、一方では仲間を思いやる優しさと友情も大切だ。4 年間で知らず知らずのうちに真のチームワーク精神が養われたと思う。先日広島への出張の折に先輩、同期、後輩が困む会を設けてくれた。ボート仲間を前にすると 40 数年前の情景が目の前に浮かぶ。サーキットトレーニングも忘れられない思い出だが、庚午橋西詰の艇庫に向かって布団を積み自転車走らせた合宿入りの頃、真夏の太田川放水路の橋の下でオールを休める時の解放感、8 人で呼吸を合わせローアウトするまで漕ぐエイトの滑らかなスピード感、入学した年の夏の江田島合宿、卒業の時貰ったオールブレード、厳しいトレーニングやレースを通じて得たチームワーク精神などの「ボートから得たもの」が我が人生の宝物だ。心の玉手箱として、江田島合宿のセピア色の写真は、同期が額装してくれ、自室の壁を飾っている。

ところで現在の私は、既に仕事の最前線からは身を引いているものの、未だ新しい科学技術の開発と工業化のために微力ながら力を注いでいる。入社以来変わらず化学プラント分野の仕事に従事し、今なお続けることができるのは、入社時の上司にしっかり教育を受けたこともあるが、ボートで培われた体力と精神力が大きく寄与していると思う。化学プラントは海外で建設することが多く、仕事を獲得するための競争は国内に建設する以上に厳しい。プラントの建設もチームワーク無しでは達成が難しい典型的な仕事の一つだ。

ボートを通じて得られた先輩からの教えや仲間との交流から得られたものは生きた教育でありとても大切だ。ボートでは肉体のみならず精神を鍛えることができる。人生ではどんな荒波が来るかわからないが、学生時代にボートを漕ぎ、ボートから生涯の友人とチームワーク精神を得て、これまで乗り越えてくることができたのではないかと思う。

(みささ 47 号、平成 21 年記)



自室の壁を飾る同期の写真



エイト 4 番を漕いだ全日本選手権 1966 年

最近、自分がボートから何を得心かについて考えることがある。ボートをしなかった自分と比較することはできないので、その答は単純明快というわけにはいかないが、それでも自分なりに思うことを書いてみたいと思う。

ボートを離れ就職してから数年の間は、体力にも自信はあったし、多少の困難を乗り越えるだけの精神力もあった。「ボートのしんどさに比べれば」と思いながら仕事をしてきたことも多かった。しかし、時間が経つにつれて、そのように実感することが少なくなっていった。

ボート部時代の私は、決して優秀な選手ではなかったと思う。自分なりに一生懸命に取り組んだのに結果が出ず、ボートを離れようと考えたこともあった。そんな時に自分を支えてくれたのは、ボート部の仲間であった。自分のことを理解してもらい、あたたかい目で見守ってもらった。もしそのような支えがなく、あのままボートを離れていたら、中途半端な学生生活を送っていたと思う。本当に当時の先輩、同僚、後輩の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいである。

そのような紆余曲折を経て、2年の秋くらいからはそれまで以上にボートに取り組むことができるようになった。4時半に起きて漕ぎ始めるころにやっと目が覚めるくらい眠くつらかった朝練、水しぶきをたくさん浴びて、漕がなければ体が凍ってしまいそうな初冬の練習、腰や足がしびれたようになり歩くのも難しくなったエルゴメーター、「もうできない」と思いながら不思議と最後まで頑張ることのできた比治山の坂ダッシュ、真夏に目一杯漕いだ後に飲んだビールのうまさ、などその当時でなければできない数々のことを経験させてもらった。

結局、ボート部の歴史に残せるような記録を出すことはできなかったが、印象に残るレースの一つに3年の朝日レガッタがある。合宿の途中でメンバーの交代を余儀なくされたにもかかわらず、それまでに経験できなかったスムーズなローイングをすることができ、惜しくも1秒半の差で決勝に残ることができなかったものの、1位と4位になったクルーがいた準決勝で対等のレースをすることができたのである。「自分達にもできる」という自信を持つことができたのも貴重な経験である。

そして、こんな自分が、歴代の主将に名前を連ねることになった。前田会長をはじめ、歴代の主将の方々のお話を聞く度に、「自分は主将として何をしたのか」という思いに陥るのであるが、私にとってはこの経験も大いに役に立った。

私の現役の時、部員数も少なく、ボート部の活動自体も小規模なものであった。また、西条への移転の過渡期で、練習日程や場所もばらばらといった状態であった。部費も十分でなく、道信コーチにボンゴを借り、前後2メートル以上もはみ出した状態で艇を乗せ、中央署で無理やり許可を取って東京まで運転していったこともある。「もし事故をしていたら」と考えると今でもゾッとするが、これも良き思い出である。そのような状況の中で、主将としてクラブ全体のことを考えて活動した経験も自分を成長させてくれたと思う。

あらゆる意味で、私にとってボートを漕いだ大学時代は決して忘れることのない充実した時代であった。改めてボートという競技に、そして先輩や同僚、後輩に感謝である。最近、体力も落ち、精神力も衰えてきた感否めない。しかし、体力や精神力とは違う形で自分の中にボートから得たものが形成されているような気がしてきたのである。

それは何かと言われてもうまく説明できないが、自分の中でボートを通して得たものを大切にしながらこれからも生活していきたい。

(みさき 47 号、平成 21 年記)



フォアで出場した朝日レガッタ 1983 年



放水路下流移転後の艇庫
現役時代、艇庫移転/西条移転開始の時期に重なる

現在、私は熊本の大学院で哲学を研究していて、同時に高校で講師として倫理を教えている。高校で教えていて、ポート部で学んだこと、ポート部で身に付けた技術が今の仕事に活かしていることにふと気づくことがある。

①体調管理の重要性

風邪をひいていたり、疲れていたりする時は、洗練された授業ができない。黒板にチョークで書くが、うまく説明が出てこなかったり、繰り返しが多くてくどい説明になったりする。夜更かしなどをしないことは勿論だが、疲れたらすぐ休む習慣をつけないと仕事の質が落ちる。振り返ってみると、ローヤーだった頃は強くなろうとして身体に無理な負荷をかけ椎間板ヘルニアになり、リハビリ中も焦って体力を戻そうとしては腰を壊すことを何度も繰り返した。思えば、あの頃の教訓が活かしているのかもしれない。

②緊張感のある雰囲気作り方

授業を始める時、大きな声で元気に挨拶するだけでもクラスの雰囲気は変わる。生徒の緊張感が緩んでくれば、すかさず声をかけたり、叱ったりして雰囲気を引き締める。振り返ってみると、声で雰囲気を操作する技術はコックスをやっていた時に培われたように思う。雰囲気の変化をフィードバックして生徒に声をかけたり、質問したりするのは「脚蹴り3本」イベントを入れるようなものである。大きくはっきりした声で話すことにさほど苦勞をしなかったのもコックスの経験のたまものだろう。

③マネジメントの技術

テストや体育祭、文化祭などのイベントと、授業の進度の兼ね合いを考えながら年間計画を組み立てる。質の高い授業をしようと思えば、一回授業計画を組み立てた後も何度も推敲を重ねなければならないので、授業の予習をする日程も計画に組み入れねばならない。今年は授業でディベートを取り入れてみた。ディベートの準備も論題の検討から資料収集、内容の研究、教室確保、小道具の用意と、とにかくすることが多くて計画性が要求された。振り返ってみると、みささ担当だった時は数か月前から12月の発行をにらんで計画を立て、スケジュールに沿って仕事を進めた。主務の時は部の遠征や行事をいろんな要素とのバランスにおいて考え、幹部会で提案した。主務や新入生勧誘担当では様々なイベントを企画したが、立案、人の巻き込み方などはディベート授業にもずいぶん役立ったように思う。

勿論この他にも、体力、時間を守ること、目上の方との接し方、敬語、人の励まし方など様々なことがあるだろう。こうしてポート部で見つけたものがその後どのように発展していったのかを振り返ってみると、茂里先生をはじめとする多くの方が「ポート部で学んだことは社会に出て必ず生きる」とおっしゃっていたことを思い出す。私の場合、ローヤー、故障者、コックス、マネージャー、新入生勧誘担当、みささ担当、渉外、主務などいろんな立場を体験したことも幸いしているかもしれない。だが、いかなる立場であっても、4年間をかけて取り組んだことは確かに自分の中で生きて行くだろう。

(みささ40号、2002年記)



エイト4番を漕いだ朝日レガッタ 1997年



主務として関わった創部50周年祝賀会 1999年